発　行
北海道ポーランド文化協会
〒060－0018
札幌市中央区北 18 条
西 15 丁目 3－19 安藤方
電話・FAX　011－556－8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

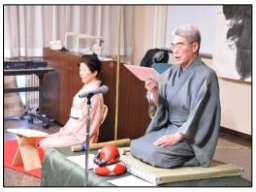
第 91 号　2017. 4. 25
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所
〒107－0052
東京都港区赤坂9－6－29－309
音響計画㈱　霜田気付
電話　03－6804－1058
FAX　03－6804－6058

第80回例会

どなたも入場無料
（ケーキつき）
予約不要。
直接会場へ
お越しください！

午後のポエジア Part7



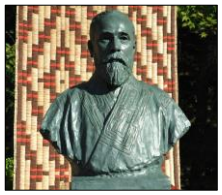
写真は昨年までの様子

詩劇「ピウスツキ～ポーランド・サハリン～愛と死」

当会の恒例行事「午後のポエジア」も7回目になります。今年は会場・構成を一新し、ブロニスワフ・ピウスツキ生誕 150 年(2016)没後 100 年(2018)にちなんで「ピウスツキ」を大きなテーマとしました。

ピウスツキはサハリン島に流刑になり、のちに樺太・北海道アイヌ民族を研究した人類学者ですが、彼の周辺で詩になりそうなものは、樺太アイヌの妻との出会いと別れ、そして彼の死などのみでしょう。

そこでまず、サハリン島にポーランド人たちがなぜやって来たのかという経緯からはじめて、彼らは如何に生きたのかを交えて、ビウスツキの時代までを手短に紹介します――ポーランドにも平和な時代があって、三国による分割統治時代、続いて独立運動で蜂起する人々、統治国による弾圧、それらが流刑へとつながっていきます。



サハリン島には多くのポーランド人が流刑になりました。決してピウスツキだけではなく、流刑囚のほかにも、ロシア軍の傭兵にも、監獄の監視人にもポーランド人がいたのです。

また、ピウスツキはなぜアイヌ民族や北方少数民族の研究に向かったのでしょうか。彼はのちに人類学者として評価されますが、もともとは法律を学ぶ学生でした。彼の本当の狙いは何だったのでしょうか。この「詩劇」を通して彼の別な側面も知っていただければと思います。

ぜひ、お誘いあわせでご覧ください。（尾形芳秀）

《第 80 回例会》朗読とお茶の会「午後のポエジア」7

日時:2017 年 5 月 27 日(土)14:00～17:30(開場30分前)
会場:ドラマシアターども(江別市 2 条 2 丁目 7–1、[JR 札幌駅より最速 20 分]JR 江別駅を出てすぐ右手へ徒歩 5 分、TEL 011-384-4011)

14:00～ 〈詩劇〉ピウスツキ～ポーランド・サハリン～愛と死
シナリオ:尾形芳秀
演　　出:斉藤征義
舞台監督:霜田千代麿
ピアノ演奏:坂田朋優
朗　　読:長屋のり子(自作詩)、ミハウ・マズル、熊谷敬子、菅原みえ子ほか
～15:30 終了
15:40～ 交流とお茶会(ケーキ、スナック、ワイン、ソフトドリンク、コーヒーなど)　入場無料
参加者全員で、ポーランドの詩を朗読します(プリントを用意)。
飛び入り歓迎
持参可能な楽器をお持ちの方は、お好きな音楽を演奏してください。
～17:30 散会

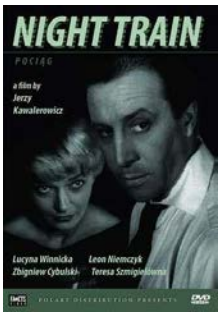
共催:ポーランド広報文化センター
後援:札幌市・札幌市教育委員会

お問い合わせ:TEL 090-2695-3880、FAX 011-812-9872、E メール:cocobluemoon@gmail.com(小林)

《第 81 回例会》ポーランド映画ビデオ鑑賞会 2017

イェジー・カヴァレロヴィチ監督の世界

ポーランド映画ビデオ鑑賞会第二弾として、カヴァレロヴィチ監督の名作『夜行列車』(ヴェネツィア国際映画祭ジョルジュ・メリエス賞受賞)と『尼僧ヨアンナ』(カンヌ国際映画祭審査員特別賞受賞)をとりあげます。お誘い合わせでご参加をお待ちします。



日時:2017 年 7 月 17 日(月・祝) 13:00～
会場:札幌エルプラザ 4F 大研修室(北 8 西 3)

13:00～14:40 夜行列車(100 分)
14:50～16:40 尼僧ヨアンナ(108 分)
16:40～17:00 作品について意見交換　入場無料

夜行列車 1959

スターリン死後の“雪解け”で改革成った、ポーランド映画界の充実期に作られた、みずみずしさと力強さを合わせ持つ秀作。

主人公マルタは年下の男との恋を逃れて、ワルシャワからバルト海沿岸に向かう夏の週末の夜行列車に乗り込む。乗客は聖職者、医者、弁護士、新婚カップル、不眠症に悩む男などさまざま、彼女を追う恋人もその中にいた。そこへ一人の殺人犯が紛れ込んだため起こる波紋をサスペンス風に描きながら、それぞれの人生を鋭くあぶりだす。

尼僧ヨアンナ 1961

20 世紀ポーランドを代表する作家イヴァシュキェヴィチ(1894–1980)の短編小説の映画化。

ポーランド北方の辺境の尼僧院に赴任する司祭スリンが僧院近くの宿屋で僧院の噂を聞く。院長ヨアンナをはじめ、尼僧たちはみな悪魔にとりつかれ、スリンの先任者はヨアンナの魔性に狂って火刑に処されたのだ。そして会ったヨアンナは、平常時は美しく淑やかだが、ひとたびその魂が悪魔を呼べば、獣のように肉の交わりを求めて這いずり回るのだ……鬼才カヴァレロヴィチによる真の恐怖映画。

《国際雪像コンクール 2017》

ポーランド雪像チームを訪問して

第 68 回さっぽろ雪まつり第 44 回国際雪像コンクール（2017.2.5–9、大通西 11 丁目国際広場）に、シロンスク県ザブジェ市から、カトヴィツェ美術大学のコツランガ教授をリーダーとする Team Snow Art Poland が 2 年ぶり 2 度目の参加、その作品（Pressure 重圧）は第4位に輝きました。

「人の目に見えている既存の物体のサーフェイスを忠実に模写する雪像パフォーマンス」という、これまでの私の雪まつり観が根底から覆された。

大通西 11 丁目の国際雪像コンクール会場のポーランドブースでは、リーダーの彫刻家コツランガさんをはじめ、写真家のムシャリクさん、グラフィックデザイナーのプロバさんからなるアーティスト集団が無言で雪を削っていた。「我々はポーランドから来たからといって特別な文化を披露するのでも、日本の人たちに固有のメッセージを発するのでもなく、人種や国境を超えた人間社会全体に対するメッセンジャーである」とコツランガさんは言う。

「頭」と「肉体」が切り離された彼の作品には、人間の行動の軌跡と現代人の営みの本質にある隠された欲望が見え隠れしている。今回の作品「重圧」においては、現代の人々すべてが平等に担う過酷な重荷を表現する一方、その先には苦悩を耐え抜いたあとに待つ希望が見えるように思える。

無言で雪を刻む彼らには言葉は必要ないと言う。なぜなら、沸き起こる彼らの内面のすべてを、何にも優って彼らの彫刻作品自体が物語っているからだ。巨大な作品を真剣な眼差しと肉体を駆使して仕上げてゆく彼らの姿勢の向こう側には、人の目には見えない内面からの表現を吐露した瞬間の喜びと、それを人々と分かち合う喜びの笑顔がもうすぐそこに見えている。

雪まつり会場の一角に本物のアーティストの姿を見た。（松山 敏）

（左・左から）Tomasz Koclęga 教授, Piotr Muschalik, Piotr Proba, Jacek Czarnuch, Junko Fujimori（©松山敏、尾形芳秀）

北海道ポーランド文化協会の皆様

さっぽろ雪まつり国際雪像コンクール期間中には、沢山の会員の皆様に会場まで足を運んでいただき、暖かいお言葉、心のこもった差し入れを頂き、本当にありがとうございました。

チームを代表して、改めて御礼申し上げます。

皆様の暖かい激励のおかげで、4位入賞することができました。いい結果であったとは言い切れませんが、無事入賞を果たしほっとしております。

札幌の滞在期間が短かったこと、また、日中の気温が高かったため作業が夜に集中して行われたことなどで、せっかくお誘いいただいた交流会に参加が叶わず申し訳ございませんでした。

来年は是非日程に余裕を持たせ、皆様とゆっくりとお話できる機会が設けられればと存じます。

ポーランドにお越しの際、もしシロンスク地方（Katowiceを中心とした地方で、私たちはここの Gliwice, Zabrze という街に住んでいます）に足を運ばれるご予定がありましたら、是非ご連絡ください。

また再会できる日を楽しみにしております。

皆様のご多幸を祈念しております。

Snow Art Poland
リーダー Tomasz Koclęga（代筆 藤森順子）
https://www.facebook.com/snowartpoland/

2017 年冬、Snow Art Poland チームはロシアのクラスノヤルスク（第5回大会、観客賞受賞=写真左=）、フランスのヴァロワール（第 34 回大会=写真右=）の雪像コンクールにも参加しました。

Manggha Museum 代表の北海道視察旅行～報告とお礼～

クラクフ市にある日本美術技術マンガ博物館 Manggha Museum とジョーリ市立博物館は、2018 年にブロニスワフ・ピウスツキおよび、アイヌ民族と文化に関する彼の研究をテーマとする展覧会を開催する準備を進めています。流刑囚にして優れた民族学者であったブロニスワフは、極東、すなわちサハリンと北海道の諸民族と文化を研究し、世界で最も偉大な民族学者の一人に数えられますが、ポーランドではいまだ未知の人です。1903 年のブロニスワフの北海道旅行と彼のアイヌ民族研究の成果の大部分は、いまだに、井上紘一教授や Alfred F. Majewicz 教授など、この問題に興味をもつ日本とポーランドの専門家と、いくつかの博物館のみが関心をもつに留まっています。

2018 年秋に展覧会とシンポジウムの開催が計画されています。クラクフ市における展覧会では、主にブロニスワフ・ピウスツキの人柄と、サハリンと北海道の諸民族に関する彼の研究（コレクション）に、ジョーリ市の展覧会では民族学的側面に、焦点をあてます。マンガ博物館では同時期に、このポーランド人流刑囚・民族学者を記念する国際学術シンポジウムが開催されます。また、スレユベクのユゼフ・ピウスツキ博物館の後援による（ユゼフの曾孫娘）Danuta Onyszkiewicz のウェブサイト上での協力と、Anna Shimomura（ワルシャワ美術大学（メディアアート）、Krzysztof Wodiczko の指導のもと卒業論文を執筆）のプロジェクトが予定されています。

ブロニスワフ・ピウスツキの研究は、疑いもなく、アイヌ民族の芸術と習慣の保存に貢献しました。ブロニスワフの歴史と業績は、2019 年のポーランドと日本の国交百年にふさわしい事業です。さらに 2018 年はブロニスワフの没後百年にあたります。展覧会と国際シンポジウムの計画は、日本におけるポーランド外交の歴史の重要な一コマとなり、両国の国交百年記念プログラムの一部となるでしょう。

展覧会と国際シンポジウムの準備のため、マンガ博物館を代表して私（Nowak）と同僚の Anna Król 学芸員が 2 月 4～9 日に北海道に滞在しました。面会と懇談のプログラムは、ポーランド広報文化センターが北海道ポーランド文化協会の協力を得て作成しました。2 月 5～7 日にはセンターのミロスワフ・ブワシチャク所長とマリア・ジュワフスカ副所長が同行しました。主な訪問先は以下のとおりです――国立アイヌ民族博物館（2020 年開設予定）設立準備室主幹の佐々木史郎博士、白老町のアイヌ民族博物館（2013 年にポーランド政府が寄贈し除幕式が行われたブロニスワフ・ピウスツキの胸像を保管）の村木美幸専務理事、平取町立二風谷アイヌ文化博物館の森岡健治館長、萱野茂二風谷アイヌ資料館の萱野志朗館長（志朗氏の父、茂氏は平取町の2博物館のコレクションの収集者）、北海道博物館の小川正人アイヌ民族文化研究センター長、北大植物園（北方民族資料室、バチェラー記念館［1903 年にブロニスワフが滞在］）、北大総合博物館（有名なピウスツキのロウ管のレプリカと再生された音源を展示）。

そのほかにも、大学の名誉教授やポーランドと日本の友好活動に熱心に取り組むすばらしい方々とお会いし、北海道滞在中ずっと、たいへんな献身とご援助を賜りました。私たちはこれからも白老と二風谷や、北海道のすばらしい冬景色を思い起こし、井上紘一教授、安藤厚教授、そして特に白老、二風谷を案内してくださった尾形芳秀氏について語り合うことでしょう。

雪まつりの時期に札幌を訪問できて幸運でした。おかげさまで国際雪像コンクール参加の Snow Art Poland チームにお会いできて、旅の価値も高まりました。さらに、北海道の食やすばらしいサッポロ・ビール、そしてなによりも素敵な人々を思い出し、これからも賛嘆しつづけることでしょう。

最上のおもてなしすべてに感謝いたします。

日本美術技術マンガ博物館副館長
カタジナ・ノヴァク Katarzyna Nowak
http://manggha.pl/

（左から）白老町のアイヌ民族博物館、平取町立二風谷アイヌ文化博物館、萱野茂二風谷アイヌ資料館、北海道博物館にて

《追悼アンジェイ・ワイダ監督》

ポーランド映画祭 2017 in 札幌

〈後援イベント〉ポーランド映画祭 2017 in 札幌、札幌プラザ2・5、2017 年 3 月 18 日(土)13:00～17:30、映画解説トーク:久山宏一&『灰とダイヤモンド』1958、スコリモフスキ／ワイダ両監督インタビュー映像&『夜の終りに』1960、主催:ポーランド広報文化センター、2本で合計約 350 人が来場される盛況で若い方の姿も数多く見うけられました。

上映作品解説トーク

久山 宏一

本日は、アンジェイ・ワイダ監督追悼映画上映会にお越しいただき有難うございます。本日上映される『灰とダイヤモンド』、『夜の終りに』、両監督のビデオメッセージ、そして遺作『残像』について、手短に解説いたします。

I

『灰とダイヤモンド』は、ポーランドでは 1958 年 10 月 3 日、日本では 1959 年 7 月 6 日に封切られました。

まず、タイトルについて――表題は「灰」と「ダイヤモンド」の対立を表していますが、ここに「火」という第三項を入れると意味合いを理解しやすくなります。「火」は戦争、「灰」は戦災・廃墟、「ダイヤモンド」はそれでも燃え尽きずに輝きつづける愛国心の象徴――そうお考えください。

ドイツ占領下に、反ソ的なロンドン亡命政府の指導の下、対独抵抗運動組織「国内軍」に所属していた若者三人。ポーランドはソ連軍によって「解放」され社会主義国圏に入ります。祖国はドイツから独立を回復したがソ連に服従することになった……やり場のない失望感を味わう若者たち。

映画は起承転結の4部構成です。「起」は彼らが親ソ派の党幹部シュチュカを暗殺する場面。ところが殺したのは無辜の労働者でした。若者たちはホテルに投宿し本物を暗殺する機会を探ります。「転」は若者の一人、主人公のマチェク・ヘウミツキとホテルのバーで働くクリスティナのラブシーン。マチェクに「生」への思いが目覚めます。「結」は二つの人殺し――マチェクがシュチュカを暗殺し、逃亡を図って警備隊に射殺されてしまいます。

この映画が日本で公開されたとき、肯定的に評価する知識人のなかに、マチェクを体制に押しつぶされる挫折者ととらえる人と、テロリストとして使命を貫徹した男ととらえる人が現れました。

前者は大島渚、井上光晴など左翼系の人々です。大島は日本公開から 1 年後に『青春残酷物語』『太陽の墓場』でワイダ作品に言及しています。なお、マチェクを演じた俳優ズビグニェフ・ツィブルスキは今からちょうど 50 年前の 1967 年 1 月に事故死、ワイダは翌 1968 年に傑作『すべて売り物』を彼の思い出に捧げますが、その撮影中に大島はワルシャワを訪れワイダと初めて面会しています。

後者が三島由紀夫です。三島(1925.1.14–1970.11.25)とワイダ(1926.3.6–2016.10.9)はほぼ同年齢で、生きた年月はワイダが 90 年 7 ヵ月、三島が 45 年 10 ヵ月――ワイダは三島と同じころ生まれて、三島の2回分の寿命を与えられた――そう考えると私たち日本人にはわかりやすいでしょう。

「昭和」と同い年だったことから、「三島は文字通り昭和っ子として、昭和という年代とその生涯を共にしたといえるだろう。いささか大げさな言い方を許していただくなら、昭和の日本とその鼓動、その興廃、盛衰を共にしたのだ」(佐伯彰一、『金閣寺』解説、新潮文庫、2010、351–352)といわれることもあります。ワイダについては、「全体主義」(この語は 1923 年に生まれ、ポーランドでユゼフ・ピウツスキがクーデターにより独裁的[全体主義]体制「サナツィア[政界浄化]」を築いたのは 1926 年です)と同い年だった、あるいは「芸術としての映画」(1920 年代後半に無声映画の頂点・発声映画[トーキー]の誕生・アカデミー賞の創設といった映画芸術の大転換が起こります)と同い年だった……などといえるかもしれません。

それはともかく、同じ時代を生きた二人の生涯には共通点があります。⑴第二次世界大戦のとき成人するかしないかの年齢だったため戦闘には加わっていないこと、⑵二十代半ばに人生の転機を迎え(1949 年、三島は大蔵省を退官し『仮面の告白』を出版、ワイダは美術大学から映画大学へ転校)、⑶三十代前半に生涯最高の傑作(『金閣寺』1956、『灰とダイヤモンド』1958)を発表したことなどです。

さて、『灰とダイヤモンド』が日本で公開された

1959 年夏に話を戻すと、三島は『週刊明星』にエッセイ「不道徳教育講座」を連載中でした。8月2日号に「暗殺について」を発表し、その冒頭に「このごろの日本では、『暗殺』といふものがはやらなくなりました。最近での一等良い映画だつたといへる『灰とダイヤモンド』では、第二次大戦後のポーランドの暗殺者の動きがとらへられてゐましたが、戦前では、政治的暗殺は日本人のお手のものでした。ところが戦後にはあの謎の下山事件を除いたら一件もない」と書き、続けてその原因を三島流に分析しています。興味深い文章ですので一読をお勧めします。……と申しましても、実は「暗殺について」は、今日読むのが難しい文章になっています。

『続不道徳教育講座』(1960.2)で一度単行本化されますが、以後の刊本(現在も角川文庫で手に入ります)からは省かれているためです。理由は容易に推測できます。1960 年の後半に日本で暗殺(未遂)事件が連続したからです。7 月に岸首相が重傷を負い、10 月には浅沼社会党委員長が演説中に刺殺されます。これを踏まえて、三島自身または出版社が再掲を差し止めたのでしょう。1961 年 2 月に雑誌発表された、浅沼事件をめぐる大江健三郎「政治少年死す」が今も単行本化されていないのは有名ですが、三島の「暗殺について」も今は『決定版三島由紀夫全集』(第 30 巻、555–559、新潮社、2003.5)でしか読めません。

『灰とダイヤモンド』を、躊躇いつつもテロを決行した青年の物語と読解した三島は、以後、映画『からっ風野郎』(1960.3 封切)出演、小説『憂国』(1961.1)、映画『憂国』(1966.4)監督、小説『奔馬』(1969.2)、映画『人斬り』(1969.8 封切り)出演など、テロ研究とも呼べる創作活動を展開します。そして、ご存知の通り、1970 年 11 月には自衛隊に決起を呼びかける楯の会事件を起こし、割腹自殺して果てました。こうした三島の右傾化のきっかけの一つに『灰とダイヤモンド』鑑賞があったのではないか――今後検証されるべき仮説かもしれません。

II

『灰とダイヤモンド』が日本の映画館にかかっていた 1959 年夏、アンジェイ・ワイダはワルシャワで

(『世代』『地下水道』『灰とダイヤモンド』『ロトナ』に続く)

長編第5作『夜の終りに』を撮っていました。

この映画も前の4作と同じく、当初は戦争映画として構想されました――ワルシャワ蜂起が鎮圧される直前の 1944 年 9 月、若い蜂起兵二人が隠れ家で一夜をすごし、生き延びたいと思い始める。女はそれを振り切るように、眠っている男を残して外に出る。塹壕を走っているところをドイツ兵に狙い撃たれる――これでは『地下水道』そっくりだと考えたワイダと(シナリオ担当の作家)アンジェイェフスキは、同じストーリーをもとに現代映画を作ることにします。そのとき協力したのが、若いイェジ・スコリモフスキです。彼がどのように貢献したかは、ビデオメッセージの中で自ら語っていますから、私が余計な説明をするのは控えましょう。

実は同じ 1959 年夏に、ゴダールがパリで『勝手にしやがれ』を撮っていました。『夜の終りに』と『勝手にしやがれ』には、主人公の男女の反社会性、二人が仮名を名乗っていること、結末を決めずに撮影に入ったことなどいくつかの共通性があります。2本を比較しながら鑑賞するのも面白いでしょう。

ゴダール作品がフランスで公開されたのは 1960 年 3 月ですが、ワイダ作品のポーランド封切りは検閲に時間を要し、同年 12 月にずれ込みます。その間に、映画内では「近い将来」とされていたローマ五輪が「近い過去」になっていました。

今日上映される『灰とダイヤモンド』と『夜の終りに』は、ともに「愛の映画」です。前者の二人は心身ともに結ばれた末に「死」に向かい、後者の二人は結ばれずに「生」に向かうともいえます。ワイダは『夜の終りに』を撮った後、トニー・リチャードソンの『蜜の味』(1961)を観て主人公の男性をはっきり同性愛者として造形するという方法もあったと反省したそうです。これも監督がいかに世界映画の最新の動向に敏感だったかを物語るエピソードです。

日本における『灰とダイヤモンド』応援団が大島、井上、三島だったとすれば、『夜の終りに』を熱烈に支持したのが、スコリモフスキと同い年(1938 年生まれ)の映画評論家山田宏一です。彼はこの作品を「ワイダの最高作ともいえる『失われた世代』の魂の幻滅を凝視した傑作」と賛えています。

遅まきながら、『夜の終りに』というタイトルについてひと言――これは日本の配給会社がつけたいわゆる「邦題」で、原題はポーランドの詩聖アダム・ミツキェヴィチの劇詩からとられた「罪のない魔法使い」です。過剰な希望を抱かず、戯れつつ現実を享受する若者たちといった意味合いでしょう。

映画をご覧になるとわかりますが、『夜の終りに』には随所にメタ芸術的な要素が見られます。まずはタイトル――「罪のない魔法使い」と書かれたビルボードがワルシャワの街角に並んでいます。私た

ちがこれから観る映画の宣伝がもう始まっているのです（なお、ビルボードの絵柄――主人公の男女とその周囲に描かれた輪のような線――は、監督によると、二人が魔法使いなのではなく、魔法の輪の虜になっているという暗喩なのだそうです）。ラジオからは「それでは、映画『夜の終りに』の主題歌をお聴きください」というアナウンスとともに、少し前のシーンでは生で歌われていた歌が流れます。極めつけは夜明けのシーンで、バジルが劇場の緞帳に見立てたカーテンを開けて「これでお芝居はおしまい」と宣言します――映画の作者は、こうしたシーンを通して、芸術と現実の境目の約束性（揺らぎ）について観客に考えさせようとしているようです。これはゴダールなどのヌーベルバーグ映画との共通点でもあります。

『夜の終りに』には、ジャズ、家電機器（テープレコーダー、ラジオ、シェーバー）、自動車の運転免許など今から 60 年近く前の最新モードが次々と出てきます。そのなかで、ボクシングだけは解説が要るかもしれません。みなさんは、ポーランドが当時ボクシング大国だったことをご存知ですか。ローマ五輪では金 1、銀 3、銅 3、東京五輪では金 3、銀 1、銅 3 と、それぞれ 7 つのメダルを獲得しています。そうした流行期にスコリモフスキはボクシングの練習をしていたわけです。映画の主人公バジルをスポーツ医師にしたのも、それと無関係ではありません。

III

終りに、ワイダ監督の遺作『残像』にも触れましょう。クランクアップは 2015 年 10 月末、ポーランドでの初上映は 2016 年 9 月のグディニャ映画祭でした。その直前にワイダ監督はご自宅で日本の観客のためにインタビューに応じてくださいました。数週間後の 10 月 6 日、私たちの許に突然の悲報が届きました。ポーランドでの一般公開は本年 1 月から、7 月には札幌でも封切られます。

英語題は Afterimage と単数形ですが、原題は Powidoki という複数形です。この表題には二つの意味が込められていると思います。

一つは、映画芸術の本質を問いたいという思いです。1 秒 24 コマの静止画像（複数の残像）を私たちは「動画」として見るわけですが、ワイダは自分が生涯懸けて取り組む芸術分野を絵画（静止画）から映画（動画）に変えたことの意味について、考え直しているのではないでしょうか。映画は、1949 年から主人公の前衛画家・美術史家ヴワディスワフ・ストゥシェミンスキ（1893–1952）が亡くなるまでの数年間を舞台にしていますが、これはワイダが映画大学で勉強していた時期と重なります。

もう一つは、ワイダの記憶に残った1950年前後のスターリン全体主義時代の残像です。身体の障害（画家は第一次世界大戦で片手・片脚と片目の視力を失った）を乗り越えて創作と教育に全身全霊を捧げた主人公に、自分の分身を認めたのかもしれません（最晩年の監督は足腰の衰えに苦しんでいた）。

こうして、絵画と映画の本質、若きワイダが生きた全体主義時代の本質を問う傑作が、私たちの前に残されました。みなさま、ぜひこの映画の上映にも足をお運びください。

IV

私は 1996 年 10 月に初めてワイダ監督にお目にかかりました――神戸映画祭での、ある「出来事」が忘れられません。ワイダ監督と高野悦子さんの公開対談の場で、私は通訳を務めさせていただきました。進行に関して、主催者からは、司会者がお二人を舞台に呼び対話を始めるといった、あまりにも簡単な説明だけ。私はポーランドと日本の映画界を代表する偉人たちの傍らにいるだけで緊張して、予定されている発言の内容などをお二人に確認する勇気が出ませんでした。

さて本番。私は、ワイダ監督はにこやかに手でも振りながら登場されるものと思っていました。ところが、監督は極めて真面目な表情でステージの真ん中に直立されると、日本式に深々と敬礼されたのでした。頭を上げると、「私は、阪神淡路大震災から 1 年余りで見事に復興を遂げられた神戸の人々に心よりの敬意を捧げるためにここに参りました」――そう言われたのでした。その言葉を通訳しながら味わった感動は、今も鮮やかに残っています。けっして大義を忘れず、「私」は二の次なのです。私は2週間監督夫妻にご同行する光栄を得ましたが、いつも画帳とメモ帳を手放さない監督の勤勉さには頭の下がる思いでした。

それ以来、私は密かにワイダ監督を私淑しております。幸い昨年 6 月にクラクフで監督との再会がかないましたが、これが永遠のお別れになりました。今私は人生の師を失った寂しさから途方に暮れています。

くやま こういち 埼玉県生まれ。東京外国語大学卒業、早稲田大学大学院中退、ポズナン市アダム・ミツキェヴィチ大学より博士号（スラヴ文学）取得。専攻はロシア・ポーランド文学、ポーランド文化、比較文学。ポーランド広報文化センター職員。

(©Maciej Komorowski)

『灰とダイヤモンド』とビリー・ホリデイ「コートにスミレを」

松山 敏

昨年亡くなられたアンジェイ・ワイダ監督の名作『灰とダイヤモンド』は何度もみていますが、今回、ポーランド映画祭で、大劇場の特大スクリーンで見ることができたのは大きな喜びでした。

何度観てもその度に新たに気づく演出が盛り込まれているこの映画の、ジャズを愛する者の一人としての視点から聴こえてくる、ワイダ監督の感動的なメッセージに関して書き留めておこうと思います。

とはいえ、これはあくまでも私の主観と洞察にもとづく「この映画の裏魅力」で、実際にワイダ監督が意図されたことかどうかは定かではありません。しかし、以下のように「スミレの花束」にまつわるシーンが4回も出てくると、意図的に盛り込まれた「裏の演出」のように思えるのは私だけでしょうか。また、このような観点からこの傑作映画が語られるのは、おそらく初めてではないでしょうか。

――⑴マチェクが「スミレ好き？」とクリスティーナに語りかける、⑵あとで会う約束を取りつけたとき、マチェクが「スミレの香りが増してきた」と語る、⑶クリスチーナが無言でスミレの花束をマチェクに差し出す、⑷ホテルを去ろうとするアンジェイに子供たちが近づき「旦那様、スミレを買って」と迫ったとき、その香りを嗅ぐのも束の間、その場面を跡形もなく打ち消して立ち去る――。

スミレの花束にまつわるこの4シーンのうち、特に涙を誘うのは⑶です。ジャズシンガーのビリー・ホリデイにまつわる以下の一件と重なるのです。

ジャズ好きの方なら誰でも“Violets For Your Furs”（コートにスミレを）という歌をご存知でしょう。マット・デニス作曲、トム・アデール作詞の 1941 年の曲で、最初にシナトラがヒットさせ、1957 年には John Coltrane が初リーダー作で取り上げ、『灰とダイヤモンド』が撮られた 1958 年には、Ray Ellis のストリングスオーケストラをバックにしたステレオ録音の LP アルバム“Lady in Satin”で Billie Holiday が歌っています。1941 年、Billie を聴くためにシカゴの有名クラブ Mister Kelly's を訪れたマットとトムのコンビは、毛皮のコートを羽織って現れたビリーにインスパイアされてこの曲をその場で書き上げたといいます。しかし、ビリーゆかりのこの曲を本人が歌ったのは、亡くなる一年前の 1958 年、つまり作曲からなんと 17 年も後のことでした。

以下に、私の意訳ですが、「コートにスミレを」*の歌詞を掲げます。

小雪が舞うブラックアイスバーンの 12 月のマンハッタンで
あなたは、束の間の春の訪れのようだった、淡いあの瞬間のことを思い起こせますか？
あなたはスミレの花束を買って私の毛皮のコートにピンで留めてくれた
ゆらゆらと舞い降りる雪の結晶がスミレの花に留まると、その場で溶けた
溶けた雪の結晶は、咲き誇る夏の花の上の朝露の雫のように見えた
あなたはスミレの花束を買って私のコートに留めてくれた
マンハッタンの灰色の冬空から束の間の青空が覗いたように見えた
それを見ていた道ゆく人々の心も溶けたように思えた
そしてあなたが、甘く溶け落ちるような眼差しで私に微笑みかけたとき
その瞬間、私たちは確かに何かに後押しされ、自分たちが完全な恋に落ちたと確信した
それは、あなたがスミレの花束を買って私のコートに留めてくれたあの日のこと

（日本語訳 Satoshi Matsuyama）

もちろん、この歌は歌い手・聴き手によりさまざまな解釈が可能です。今も仲睦まじい夫が妻に「覚えているかい、あの冬のマンハッタンのことを」と、その状況を演出した粋な男としての自分の過去を自慢げに語る歌ともなりえるでしょう。

しかし、ビリーの表現力豊かな歌は、全てが戻ることのできない過去の思い出であって、当然のように、失われた恋の切ない思い出です。

『灰とダイヤモンド』の中の、クリスチーナが無言でスミレの花束をマチェクに差し出すシーンはどうでしょうか。この数十分後には、二人にとって永遠の別れに向き合う時が来て、観る者は涙をこらえきれなくなるのです。

ワイダ作品の多くは、『菖蒲』(2008)の中に『灰とダイヤモンド』の単行本が登場するパロディーがあるように、過去の作品と関連性を持っています。そ

の後の彼の作品のどこかに、誰かがマチェクを思い出して“Violets For Your Furs”を歌うシーンがあってもおかしくないと思います。また、『灰とダイヤモンド』のエンディングのクレジットタイトルに流れる短い曲は、クリスチーナが歌う“Violets For Your Furs”の前奏のようにも聞こえるのです。

ただし、冒頭でも書いたように、これはあくまでも私の主観と洞察による「この映画の裏魅力」で、実際にワイダ監督が意図されたことかどうかは分かりません。しかし、映画祭で上映されたもう一本の『夜の終りに』の主人公はセミプロのジャズ・ドラマーですし、音楽担当はポーランドを代表するジャズ・ピアニスト、クシシュトフ・コメダです。当時は東側の国とはいえ、Billie Holiday の“Violets For Your Furs”がワイダ監督の耳元にも顕かにサウンドしていたとしても不思議ではないと思います。

また、『すべて売り物』(1968)で、前年に 39 歳の若さで事故死したマチェクことツィブルスキの墓に、彼を演じるダニエルが供える花もやはり一握の「スミレの花束」です。さらに、『灰とダイヤモンド』の中で白い馬とスミレの香りをシェアする場面を思い出せば、『すべて売り物』のラストでダニエルが野を駆ける馬と共に喜び走るシーンは、神の栄光を再び受けて光り輝くダイヤモンドのようで、マチェクの復活を予見させるとも思えるのです。

以上、いつか機会があったら、スミレの花束に何故ここまでこだわったのか、監督に直接聞いてみたいと願った、この映画の私だけの謎です。

しかし、2016 年 10 月 9 日、アンジェイ・ワイダ監督ご自身も塵芥の底深く文字通りダイヤモンドとなって先発たれ、再び栄光を浴びて輝く復活の日を静かに待っておられます(マチェク、ビリー・ホリデイ、ジョン・コルトレーンもね、そしていつかは私自身も漏れなく同様にね)。　　(まつやま さとし)

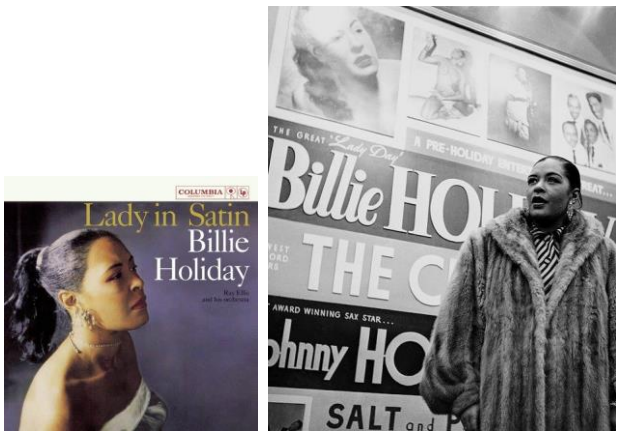
＊以下は、Billie Holiday バージョンの歌詞。[最初の 5 行]は実際は歌っていないが、オリジナルから掲載。

[It was winter in Manhattan
Falling snowflakes filled the air
The streets were covered with a film of ice
But a little simple magic that I'd heard about
　somewhere
Changed the weather all around, just within' a trice]
You bought me violets for my furs
And it was spring for a while, remember?
You bought me violets for my furs
And there was April in that December
The snow drifted on the flowers and melted where it lay
The snow looked like dew on the blossoms
As on a summer day
You bought me violets for my furs
And there was blue in the wintry sky
You pinned the violets to my furs
And gave a lift to the crowds passing by
You smiled at me so sweetly
Since then one thought occurs
That we fell in love completely
The day you bought me violets for my furs

＊時系列データ

◇アンジェイ・ワイダ『灰とダイヤモンド』

1957.11.15 アンジェイェフスキと初対面
1957.12　シナリオの共同執筆を開始
1958.1　シナリオ完成
1958.1.17　検閲が映画製作を許可
1958.1–2　主役にツィブルスキを決定
<u>1958.3–4　『灰とダイヤモンド』撮影</u>
1958.10.3　『灰とダイヤモンド』封切り



(左) “Lady in Satin” CL1157/CS8048 (右) ニューヨーク・ハーレムのアポロ劇場に入る Billie Holiday、1952 年

♪ビリー・ホリデイ “Lady in Satin”

1957 当時の名プロデューサーNorman Granz は Clef Records で 1950 年代に 12 枚のアルバムを製作した Billie Holiday との専属契約を更新しなかった。
1957.10 Billie Holiday は Columbia Records のプロデューサーIrving Townsend と、Ray Ellis のアレンジとオーケストラによるレコーディングの契約にサイン
<u>1958.2.19–21 レコーディング</u>
1958.6 Billie の死の 17 ヵ月前、アルバム“Lady in Satin”が Columbia Records から世界にリリース
1958 後半 セールス好評のため、UK 盤(Fontana)、オランダ盤(同)、オーストラリア盤(Coronet)、カナダ盤(Columbia)などが相次いでリリースされる。
1959.3.15 真の心の友で叶わぬ恋の相手であったテナーサキソフォン奏者 Lester Young の訃報を聞く。
1959.7.17 Lester の後を追うように Billie もこの世を去った(享年 44)……

日本の田舎暮らし

バルバラ数井

Barbara Kazui（旧姓 Napierała）
1988 年ポズナン市に生まれる。ポズナンのアダム・ミツキェヴィチ大学地理学科と日本学科を卒業。2009 年初来日。2012 年北海道・キロロリゾートで 1 年間のインターシップ、2014 年キロロリゾートに就職、結婚、二児を出産。余市郡赤井川村在住。

五、六年前に誰かに、どこに住みたいですかと聞かれたら、わたしは間違いなく「日本」と答えたでしょう。今もし同じように聞かれたら、わたしの答は「北海道」でしょう。この変化はどこから来たのでしょうか。それは「郷土愛」とも呼べるでしょう。

五年前キロロリゾートで働きはじめたとき、この辺りで何年も暮らそうとは、そしておそらく永住しようとは考えもしませんでした。ここに自分の居場所が見つかるとは思ってもみませんでしたが……。

わたしは世界の果てと思われている、四方を山（カルデラ）と野原に囲まれた小さな村に住んでいます。毎朝起きると窓の外のとても美しい風景に驚かされます。白い雪に覆われた冬景色だけではありません。春も、夏も、秋も、自然は緑、赤、黄金と、ありとあらゆる色彩に満ちています。

ここは「天国」のように思えるでしょう。それはほぼ間違いありません。「天国」のように、ここには美しい風景のほか何もありません。家族も、知り合いも、友だちもいません。

村の人々はとてもいい人たちで、仲良くしてくれますが、農作業に忙しく、産休中のガイジンに関わっている暇はあまりありません（これは夏の話で、冬は豪雪で誰も外に出ません）。二児の母として、わたしは一年の休暇をいただき、子育てのほかに、村の隅々まで研究し尽くしました。

話を戻せば、村の人々はいつも忙しいですが、ちょっとおしゃべりの機会があるといつも「暮らしには慣れたの」と聞かれます。わたしは正直に「大丈夫です。夫はやさしいし、食べ物はおいしいし、気候は似ていて、こういう静かで平和な田舎暮らしをずっと夢見ていたのです」と答えます。「そうです！気候と食べ物はそっくりです！わたしたちもお米を食べるし、北海道でもジャガイモを食べるでしょ」と笑いながらご近所の方に答えます。

人口 1300 人ほどの小さな村ですが、住民は外国人に慣れていて、外国人に指差ししたりしませんし（沖縄を旅したときはよくありました）、日本語で話しても驚きません。正直いって、わたしは突然ポーランドの村に移されても、違いに気づかないでしょう。

わたしの大好きな村には何があって、何が無いかという話に戻りましょう。

すでにお話ししたとおり、産休の間にわたしは「田舎暮らし」という概念を完全に理解しました。5 月から 11 月までベビーカーを押し2頭の犬を連れて村とその郊外をくまなく歩きました（人口は少なくても、村は 20km 以上に広がっていて、歩く場所はたくさんあります）。一日に 10～15 km も散歩したこともあって、村の住人すべてと顔見知りになりました。残念ながら、まだ親しいお近づきではありませんが。

わたしたちは普段、暑さを避けるため朝早く出かけます。ポーランドでこういう地方に住んだら、山歩きをするのが普通ですが、残念ながら、熊のため山歩きは禁じられています。そう、熊がいるのです！はじめてその話を聞いたときはたいへんなショックでした。「熊がそんなに人間の近くに来るはずがない」と思っていましたが、通い慣れた道の、家のすぐ近くで熊の糞を見つけたのです。それ以来わたしは熊除けの鈴を身に着けています（熊はこの鈴の音が嫌いだそうです）。最初はそれが何の役に立つのか分かりませんでしたが、近所に熊がいるかも知れないので、熊を避ける方法を村の人に教えていただき、経験に学ぶことができました。

わたしの散歩コース上のもう一つの重要ポイントは、この地域で唯一のお店であるセイコーマートです。ちょと誉め言葉をいえば、これは最近までポーランドには無かった、日用品がなんでも揃う便利なお店で、値段は店が決めるのではなく、定価です。さらに、必要なものは（オムツを含めて）何でも揃うし、セイコーマートはあらゆるコンビニのなかでいちばん安いのです。そこで、わたしたちはセコマに寄って……この散歩でいちばん大事な、アイスクリームを買います。

おそらく世界中どこにも無いことでしょうが、ステ

ィック付きのおいしいアイスが一年中買えるのです。わたしの夢が叶ったのです！ポーランドには友だちや家族を家に呼んでコーヒーとケーキやアイスクリームをふるまう習慣があって、皆は「お客さんが来る」といって、よく同じ風味のアイスを大きな箱一杯買います。ただ、それでは次の2週間に食べ飽きることがあります。それより小さいスティック付きのアイスのほうが、誰でも好きなものを選べます。違う種類のアイスを二個食べたいですか。いいですよ。誰でも二個食べてください。アイスクリームが夏だけでなく一年中手に入るのは驚きですが、そのうえ季節ごとにアイスは変わります。数ヵ月ごとに棚の構成が変わり別の風味が味わえるのです。

食べ物の話では、わたしたちのセイコーマートでする小さな買い物のほかは、車で25分ほど離れたスーパーで買います――山から海へ、ちょっと下ればいいのです。スーパーでは、いちばん重要な買い物をします――パン、肉、魚など……以上です（品物のリストの順番にもご注意ください――ポーランド人だという明らかな証拠です）。

田舎暮らしのもう一つの魅力は、村で買ったり頂いたりする（少なくとも夏の）野菜や果物、そしてお米です。そう、頂くのです。ご近所の農家の方とよい関係を築くことができれば、ときどき、売り物にならない規格外の野菜（傷ものや、形の悪いものなど）をどっさり頂けます。もちろん、味は売りものに引けを取りません。日本では、野菜も果物も安くはありませんが（たとえば、日本ではリンゴ一個が――季節と品物によって――90～190円もします。ポーランドなら、リンゴ1kgか、ときにはそれ以上買えるでしょう）、田舎に住んでいれば、それらを保存し、調理し、下ごしらえして、通常の店では手に入らなかったり、財政的に手の出ないような、瓶詰め、ジャム、ソース、冷凍食品、その他の料理をつくることができます。そのうえ、気候がポーランドと似ているので、北海道では故国と同じような野菜が手に入ります――たとえば、入手のむずかしいビーツさえ手に入るのです。

アイスクリームを食べて野菜売り場を巡ったら、わたしたちは野原のほうへ行き、至福の静寂に浸ります。赤ん坊はベビーカーで眠り、犬たちは牧草地を駆け回り（都会と違って、ここでは彼らは自由で、誰の邪魔にもなりません）、わたしはスカイプでポーランドにいる家族の誰かとおしゃべりします。この魔法の土地のもう一つの重要ポイントは、ここは「地の果て」ですが、電波とインターネットは何の問題もなく届くことです。

まとめると、北海道の田舎には何も無いけれど……何でもあるのです……。ここにはお店も、騒音も、喧噪も無く、静かで、平和で、美しい風景があります。大都会の無関心や危険は無く、素敵な人々がいます。20分でスキーリゾートがあり、20分で日本海のビーチです（自動車を買い込むのをお忘れなく。村の住民には欠かせないものですから）。お祖母ちゃんや友だちと飲むコーヒーや、チーズ&ハムサンドはありませんが、やさしい夫と二人のやん茶坊主とたくさんの食べ物――典型的な日本食材とは限りません――があります。こうしたものすべてがあるので、わたしにとってここはかけがえのない土地です。

わたしのイエは北海道です。　　（安藤厚訳）

（右上写真・奥は、道の駅あかいがわ）

北大祭 IFF2017 ポーランド料理テント“Polski Namiot”

手作りのポーランド料理はいかがですか!

2017年6月2日（金）12:00～22:00、3日（土）9:00～22:00、4日（日）9:00～17:00、北大総合博物館（北10西8）付近に出店

日本では普段は食べられないおいしいポーランド料理を食べにきてください。

（写真は昨年の様子。ギター伴奏でポーランドの歌を紹介。）

北海道大学ポーランド人留学生会
協賛：ポーランド広報文化センター
後援：北海道ポーランド文化協会

ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

カサノヴァの見た十八世紀のワルシャワ

金沢 美知子

「ポーランド国王は中肉中背だが、容姿端麗であった。容貌は格別美しくはなかったが、格別品があり、才気ばしっていて、表情にとんでいた。少し目が近く、ものをいわないときには、顔に少し憂鬱そうな影がさしたが、ものをいい出すと、その反対に活気づき、顔を輝かして雄弁にしゃべった。彼はまた話によってはかならず上品な冗談をまじえる才能をもっていた」

これは、1764 年に国王の座についてまだ間もないスタニスワフ・アウグスト・ポニャトフスキ（ポーランド・リトアニア共和国最後の国王、在位 1764–95）についての印象を綴った文章で、稀代の詐欺師にして放蕩者、ジャコモ・カサノヴァ（Casanova, Giovanni Giacomo 1725–98）が晩年に記した自伝的回想録（Histoire de Ma Vie）の一節である（引用は田辺貞之介訳『カザノヴァ回想録』集英社、1973 より）。

カサノヴァは 1725 年、イタリア、フィレンツェに貴族の婚外子として生まれ、当時のボヘミアのデュックス（Dux、現チェコ・ドゥフツォフ Duchcov）において 73 歳で生涯を終えるまで、数多くのパトロンの間を渡り歩いた。「ペテン師」「女誑し」と呼ばれることも多いが、16 歳で法学博士となったほか、哲学、数学、薬学に通じ、種々の職業についた経験をもつ教養人でもある。彼が訪問する先々で上流社会に出入りを許され、君主やその縁者、友人達から厚遇されたのは、幅広い知識とそれを巧みに社交に活かす話術によるところが大きかった。

カサノヴァという人物は様々な顔をもっているが、最大の特徴は、彼が 18 世紀という時代に典型的な国際人、すなわちフランス語を主な意思疎通の手段として諸国を渡り歩いたヨーロッパのコスモポリタンだった点にある。彼は遍歴に生涯を捧げただけでなく、訪問地の人間関係に深く入り込んで、賭博と恋愛に時を過ごしながら、その地の君主とも親交を結んだ。異国の文化を観察し、同時に享受したのである。そのカサノヴァのヨーロッパ遍歴の中でもとりわけ注目されるものの一つが、1765 年秋から 1 年半ほどの間のワルシャワ滞在であった。

（左）スタニスワフ 2 世アウグスト、Marcello Bacciarelli 画、1764（右）ジャコモ・カサノヴァ、著名な画家である弟のフランチェスコ画、1750–55 頃

カサノヴァは 1764～65 年にかけてロシアの、主としてペテルブルクを訪問している。おりしもヨーロッパでは 1763 年に七年戦争が様々な問題を残しつつも一応の収束を見、旅にとって比較的都合のよい環境が整い始めていた。彼のペテルブルクへの往路は、まずポツダムから、バルト海に沿ってダンツィヒ（現ポーランド・グダニスク）、ケーニヒスベルク（現ロシア・カリーニングラード）を経て、リガで逗留後、ペテルブルクに入るというコースであった。

ワルシャワ逗留は復路である。カサノヴァはロシアからの帰途、ケーニヒスベルクで自分の馬車を売却し、ワルシャワ行きの馬車の席を買った。同乗者は皆ポーランド人で、ポーランド語とドイツ語しか話さなかったせいもあり、退屈な旅だったようだ。

1765 年 10 月末、ワルシャワに到着するとすぐ彼は社交界に乗り出す。カサノヴァの基本的な行動パターンは紹介状を利用して訪問地の社交界に入り込むことで、彼はまず紹介状をもってアダム・ツァルトリスキ大公を表敬訪問し夕食への招待をとりつけた。次にスルコフスキ大公宅へやはり紹介状を持参し 4 時に改めて来るよう招待を受け、その足で貿易商シェンピンスキを訪ねて金子を調達し、時間つぶしに劇場でオペラの稽古を鑑賞している。

そしてその日の午後、約束通り彼はまずスルコフスキ大公のもとで 4 時間を過ごし、9 時頃アダム大公の邸に出かけた。大公は邸に集まっていたポーランドの名士達に彼を引き合わせた。そこへひとりの品格ある人物が登場する。大公はそれまでと同様に、この人物にカサノヴァの名を教え、今度は彼に「国王です」と伝えた。ここでカサノヴァは、一介の外国人である自分を国王に引き合わせるやり方が「実に安直だった」ことに驚いている。この夜カサノヴァは大いにしゃべり、国王は彼の話に聞き入って、帰るときに「いつでも宮廷へたずねてこい、喜んで会うから」と言ったという。20 年も経ってからの回想であり、むろんカサノヴァの脚色も加わっていただろうが、この場面の描写には実感がこもっていてつい惹きつけられてしまう。

カサノヴァの、賭博を楽しみ、女性と社交し、自宅で食事はとらないという生活スタイルはペテルブルクでもワルシャワでも変わらないが、君

主との出会いは少し異なっていた。彼はペテルブルクでは知人のパニン伯爵の入れ知恵で、散歩中のエカチェリーナ 2 世(在位 1762–96)の前に登場する。この仕組まれた出会いの場で彼は女帝の尊大さを感じとり、プロシア王フリードリヒ 2 世を批判したり、女帝の趣味に自分の趣味を合わせたりと相手の自尊心を擽ることに余念がない。ポーランド国王との偶然の出会いや自然な会話と比べると、女帝との出会いはいかにも「謁見」といった印象を与える。

スタニスワフ・アウグストはまだ国王になっていなかった青年期にやはり帝位につく前のエカチェリーナの愛顧を受け、彼が王位についた背景には彼女の支援もあったとされる。カサノヴァは当時のワルシャワに自立の歩みを進めようとする意気込みを感じつつも、エカチェリーナが「どういう主張をもちだすかと目をこらして待っていた」と述べ、スタニスワフ・アウグストについても、ロシアの横暴に抵抗しない柔弱な国王と評したのだ。

とはいえカサノヴァは国王に好印象をもった。イタリア贔屓の国王は借金で苦しい生活を強いられていたカサノヴァにそっと金包みを渡し、それ以来カサノヴァは毎朝この「善良な」国王の衣裳室に出かけ、話し相手を務めることになった。

平穏だった彼のワルシャワ滞在は衝撃的な結末をもって幕を閉じる。ブラニツキという当時国王の寵臣だった男と決闘する羽目になり、カサノヴァは手を負傷したが、相手の傷はさらに重く、危うく一命を落とすところであった。この決闘はワルシャワ中の知るところとなり、カサノヴァは敵方につけ狙われ、おまけに当時「国王の領土」の内では「決闘は死をもって禁じられて」いたので、この地を立ち退かざるを得なくなる。国王が国外逃亡を助けるため金銭的援助を行い、カサノヴァはワルシャワを出てドレスデンへと向かった。

カサノヴァのワルシャワ滞在記は彼の回想録の中でもひときわ興味深い。というのも、強権のロシア君主エカチェリーナ 2 世の宮廷を間近に見た直後の訪問であったため、ポーランド国王の柔和な気質と協調的な執政の描写にはロシア女帝との対比が際立っているからである。二人の君主にはむろん気質の相異があったが、それに加えて、武力によって帝位を奪取した君主と、その庇護のもと投票で選出された君主という境遇の違いもあった。カサノヴァといういかさま師、教養人、そして 18 世紀ヨーロッパのコスモポリタンの眼差しは、そうした二人の君主像を確実に捉え、ロシア帝国と濃密な関係にあった 18 世紀ワルシャワの風景を活き活きと描き出しているのである。

かなざわ みちこ 神戸市生まれ。東京大学・同大学院修了。東京大学助手、放送大学助教授をへて 1996～東京大学大学院教授(スラヴ語スラヴ文学)、2016～東京大学名誉教授、2000～01 ワルシャワ大学客員講師。編著書:十八世紀ロシア文学の諸相 水声社、編訳書:可愛い料理女:十八世紀ロシア小説集 彩流社など。

ポーランド&ニッポン歳時記

大人の塗り絵

この二、三年、大人向けの塗り絵がちょっとした流行になっています。郵便局でも、スーパでも、どこでも売っています。リラックス効果があるとのことで、私も嵌ってしまいました。

esy floresy うねうねと
pojawiają się pączki 出てくる蕾
kolorowanka 塗り絵かな
Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

już po deszczyku 雨上がり
poranek jasny pełen 澄み切る朝に
głosu skowronka 雲雀鳴く
Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョトル・ヴジェチョノ

ポーランド語シ・チュ・ジュが多い寒雀
柳の華ジプシー音楽旧市街
都鳥今日はヴィスワの中洲にゐ
岩見沢市、霜田千代麿

レーミゾフとポーランド

小椋 彩

アレクセイ・ミハイロヴィチ・レーミゾフは 1877 年モスクワ生まれ、20 世紀ロシア語散文の革新者といわれる作家だ [1]。ロシア・フォークロアに取材した作品が高い評価を得るも、革命後は亡命、異国で長いこと出版の機会を奪われ、故郷への帰還を願いつつも叶わず、1957 年パリで客死した。終生ロシアの出自とロシア語にこだわりつづけた作家だが、ポーランドとの縁が意外に深い。

19 世紀末、レーミゾフは同時代の多くの文学青年と同じく革命運動に身を投じ、学生デモの扇動者と目され（冤罪であったが）逮捕、流刑を経験する――ペンザ、ヴォログダ、ウスチ・スィソーリスク。なかでも、当時「北のアテネ」と呼ばれたヴォログダには「政治犯」として（多くのポーランド人を含む）思想家や文学者、テロリストが集まり、文学論を戦わせていた。この地で文学に開眼した青年は、ロシアにも移入されはじめたヨーロッパ・モダニズムに傾倒する。

彼を特に魅了したのは、世紀末ポーランドに花開いた複合的な文化潮流「若きポーランド派」の旗手スタニスワフ・プシビシェフスキ（1868–1927）で、その戯曲（『憂鬱』、『雪』、『客』）を翻訳し、発表に奔走する。デンマーク人作家マデルングに送った 1903 年の書簡からは、当時のレーミゾフのプシビシェフスキに対する心酔ぶりが伝わってくる [2]。

「いま、プシビシェフスキ最後の戯曲『雪』を翻訳しています。誓って言いますが、これを読んだらあなたはきっと感動するに違いない」

「幸運が微笑みました。『雪』が掲載されます、送ります。『客』が掲載されます、これも送ります。もしかしたら(!)、カスプローヴィチ［若きポーランド派の詩人］の『ユダ』も掲載されます。それに、おそらくスコルピオン社が『大地の息子たち』を出版してくれます（プシビシェフスキ最後の小説、ぜひ紹介したい）」

レーミゾフにとってプシビシェフスキとはヨーロッパのモダニズムそのもので、彼への熱狂はのちの作品にも色濃く反映されているが、そのことはしばしば否定的にとらえられる。退廃的な芸術至上主義の影響下に創作された初期散文詩に、レーミゾフの資質は活かされておらず、一方このとき培われた「デカダン」のイメージは、長いこと作家につきまとうこととなった。

さて、こうした熱狂にもかかわらず、レーミゾフ自身はポーランド語を自由に操るには至らなかった。イワン・カリャーエフ [3] との共訳として発表された『憂鬱』だが、じつはカリャーエフ単独の仕事と告白されているし、『雪』にも妻セラフィーマのかなり大きな手助け（あるいはそれ以上）があった。しかしそれでも、作家のポーランドへの愛着はたしかだったといえる。リトアニアの出自をもつ妻への愛がそうさせたのかもしれない。

レーミゾフの「ポーランド好き」を語るとき、言及したい人物がもう一人いる。亡命ポーランド最大の雑誌『クルトゥラ』の編集人をつとめたユゼフ・チャプスキ（1896–1993）である。画家で文学評論をものし、軍人でもあった彼が著した回想『スタロビエルスクの思い出』と『無慈悲な大地で』は、第二次世界大戦中のソ連軍によるポーランド将校虐殺事件（カティンの森事件）が初めて活字になったものとされる。リベラルな伯爵家に生まれたチャプスキは、ロシア語を含む数ヵ国語に堪能だった。ペテルブルグ大学に学び、ロシアの神秘主義に傾倒する。革命後はポーランドへ移り住み、ワルシャワの美術アカデミーに入学するも、卒業をまたずポーランド軍に入隊志願し、上記の戦争を体験する。

亡命ロシア人のレーミゾフと、亡命ポーランド人のチャプスキは、すでに 1938 年にパリで会っているが、親しくなるのはレーミゾフ晩年のことだ。このことを、レーミゾフの隣人で東洋学者、そしてポーランドの血を引く亡命ロシア人の、ワシーリイ・ニキーチン（1885–1960）が回想している。

「AM［レーミゾフ］宅への、ロシア人でない訪問者で、まず名を挙げたいのは、伯爵のユゼフ・チャプスキだ。AM を崇拝するポーランド人で、美術の専門家。アンデルス将軍の戦友で、感動的な本の著者でもある。感動的というのは、これが 1840 年代のロシアとポーランドの関係や、著者自身も参戦した大祖国戦争についても語っているからだ。だが同時にチャプスキは、ソヴィエトの肯定的な現実にも目をむけている。たとえば、豊富な蔵書を誇る、よく整備された図書館というような。彼ほどこうした

側面を語るにふさわしい人物はいまい。というのも、家族の領地がミンスク県にあり、彼自身もペテルブルグのギムナジウムを卒業した。そしてワルシャワにいた亡命ロシア人、なかでもフィロソフォフと親しく、そもそもロシア文学や社会事情に通じていた。我々がよく知らないポーランドの詩人ノルヴィトを AM に紹介したのもチャプスキだ。

AM はポーランド人に対して特別な感情を抱いていた。ポーランド語を知らなかったにもかかわらず。彼がポーランド人と知りあったのは、北方ロシアの流刑地でのことだ。AM は私に、サヴィンコフやカリャーエフといった、ワルシャワから来たロシア人についても話してくれた。不合理なロシア化政策のために、彼らは帝政の抑圧を憎悪していた。

私が AM とチャプスキの友情について考えるとき、ある例が思いだされる。それはプーシキンとミツキェヴィチの関係だ。父の赴任先のポーランドで生まれ、母方の親類がポーランド人の私にはワルシャワに親戚もおり、ワルシャワのギムナジウムを卒業した。ギムナジウムでは、ポーランド語で会話すれば、すぐ学校の監禁所に入れられた。私はポーランドとロシアの敵対関係、相互不信、言いたくはないが憎悪といったものに、非常に心を痛めている。もし明晰な判断力と、過去を忘れようという願いをもつならば、私たちは協力し互いに理解しあえると思う。両国の相互理解の可能性の証拠になりうる鮮烈な例が、私にとっては、チャプスキのようなポーランド人や、ゲルツェンのようなロシア人だ。いずれにせよ、AM はポーランド人を愛していた。リトアニア出身の彼の妻が愛するように」[4]

レーミゾフは、チャプスキの評論によって初めてポーランド文壇に紹介された。レーミゾフの死後、『クルトゥラ』誌に感動的な弔辞を発表したのもチャプスキだ。プーシキンとミツキェヴィチにたとえられた二人の亡命者の知られざる友情とその後の展開について、書くべきことは多いが、また別の機会に譲りたい。

———————

写真

(1) Aleksei Mikhailovich Remizov, 1909

(2) Ivan Kalyayev, 1905.2.17（暗殺直後）

(3) Józef Czapski, 1943.1

注

[1] レーミゾフは日本にはすでに1910年代に紹介されている。邦訳には『小悪魔』安井侑子訳 国書刊行会 1981、『十字架の姉妹』斎藤安弘訳 河出書房新社 1975、『第五の悪』灰谷慶三訳 白水社 1973 などがある。

[2] Письма А. М. Ремизова и В. Я. Брюсова к О. Маделунгу. Copenhagen, 1976. С. 13, 18.

[3] Ivan Kalyayev 1877–1905 ワルシャワ生まれの詩人、テロリスト。父はロシア人、母はポーランド人。ロシア大公セルゲイを暗殺し処刑された。この事件をもとにアルベール・カミュが戯曲『正義の人びと』1949 を書いた。

[4] Никитин. В. П. «Кукушкина» (память А. М. Ремизова). Воспоминания / Ремизов. А. М. Павлиньим пером. 1994. СПб. С. 223–225.

———————

おぐら ひかる 埼玉県生まれ、北海道大学卒、東京大学大学院修了、博士（文学）。2017～東洋大学文学部助教、2001～02 ワルシャワ大学日本学科客員講師。訳書にオルガ・トカルチュク『昼の家、夜の家』『逃亡派』（白水社）など。

『残像』2016 アンジェイ・ワイダ監督の遺作、札幌・シアターキノ、2017 年 7 月 8 日（土）～
東京・岩波ホール、6 月 10 日（土）～7 月 28 日（金）

原題 Powidoki（英題 Afterimage）／監督・脚本 アンジェイ・ワイダ

［詳細］2016 年／ポーランド映画／ポーランド語／99 分／カラー／シネマスコープ／5.1ch／DCP／配給：アルバトロス・フィルム／後援：ポーランド広報文化センター／提供：ニューセレクト／宣伝：テレザ、ポイント・セット

2016 年 10 月 9 日、アンジェイ・ワイダ監督が急逝した。享年 90。世界から尊敬される巨匠が死の直前に完成させた作品は、戦後の社会主義圧政下で、自らの信念を貫き、闘った実在の芸術家の姿だった――。

『残像』は、ポーランド人の画家ヴワディスワフ・ストゥシェミンスキ（1893–1952）の晩年の 4 年間を描いているが、アンジェイ・ワイダが生涯を通して追求し続けたテーマを凝縮させたかのような、まさに遺言と呼ぶにふさわしい作品に仕上がっている。

今後の予定

《第 80 回例会》**第 7 回朗読とお茶の会「午後のポエジア」**、ドラマシアターども(江別市 2 条 2 丁目)、2017 年 5 月 27 日(土)14:00～17:30

《後援》**北大祭 IFF2017 ポーランド料理テント "Polski Namiot"**、主催:北海道大学ポーランド人留学生会、北大総合博物館(北 10 西 8)付近、2017 年 6 月 2 日(金)12:00～22:00、3 日(土)9:00～22:00、4 日(日)9:00～17:00

(参考)**映画『残像』2016 アンジェイ・ワイダ監督の遺作**、シアターキノ(狸小路 6)、2017 年 7 月 8 日(土)～

《第 81 回例会》**ポーランド映画ビデオ鑑賞会 2017～イェジー・カヴァレロヴィチ監督の世界**、札幌エルプラザ 4F 大研修室(北 8 西 3)、2017 年 7 月 17 日(月・祝)13:00～14:40「夜行列車」1959、14:50～16:40「尼僧ヨアンナ」1961、16:40～17:00 作品について意見交換

《第 31 回定例総会&創立 30 周年祝賀会》、ニューオータニイン札幌(北 2 西 1)、2017 年 10 月 21 日(土)11:00～総会、12:00～祝賀会

協会の 30 年を賑やかに祝いたいと思います。
今から日程の確保をお願いします。

入会・退会(ご芳名、敬称略)

入会(2017.1～3)長谷川麻里香、松山敬子
退会(2017.2)樫田一恵、水上さえ、安田文子、横田正樹

今年度(2016.9～2017.8)会費納入のお願い

年会費(一般3千円、学生 1,500 円)と、維持会費(任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。

【郵便振替口座】記号 02740 5 番号 19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

※ 未納分については、個別の納入お願い文書と振替用紙をお送りします。

『ポーレ』原稿募集

エッセイ(旅行記、新刊紹介、映画・演劇・演奏会の感想)、研究(歴史、社会、経済)、俳句・詩その他なんでも歓迎。事務局へご連絡ください。

住所変更・メールアドレスのご連絡を！

転居された方、イベント予定などのメールが届いていない方は、事務局(1ページ目左上参照)へご連絡ください。

目　次

《第 80 回例会》朗読とお茶の会「午後のポエジア」7
詩劇「ピウスツキ～ポーランド・サハリン～愛と死」(尾形芳秀) …… 1
《第 81 回例会》ポーランド映画ビデオ鑑賞会 2017「イェジー・カヴァレロヴィチ監督の世界」 …… 2
《国際雪像コンクール 2017》ポーランド雪像チーム(松山敏、トマシュ・コツランガ) …… 3
Manggha Museum 代表の北海道視察旅行～報告とお礼(カタジナ・ノヴァク) …… 4
《追悼アンジェイ・ワイダ監督》ポーランド映画祭 2017 in 札幌
上映作品解説トーク(久山宏一) …… 5
『灰とダイヤモンド』とビリー・ホリデイ「コートにスミレを」(松山敏) …… 8
日本の田舎暮らし(バルバラ数井) …… 10
北大祭 IFF2017 ポーランド料理テント"Polski Namiot" …… 11
カサノヴァの見た十八世紀のワルシャワ(金沢美知子) …… 12
ポーランド&ニッポン歳時記(津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿) …… 13
レーミゾフとポーランド(小椋彩) …… 14
『残像』2016 アンジェイ・ワイダ監督の遺作(シアターキノ) …… 15

POLE
第 91 号 ポーレ編集委員会
熊谷敬子／越野剛／塚本智宏／松山敏／ラファウ・ジェプカ